

絶滅危惧種ニホンイトヨの展示と繁殖について

中野浩史（島根県立宍道湖自然館ゴビウス）

ニホンイトヨ *Gasterosteus nipponicus* は、従来はイトヨ日本海型や日本海系イトヨと呼ばれていたが、2014年に新種記載され、学名と和名が決定した(以下イトヨとする)。日本海側では北海道から島根半島、太平洋側では北海道から利根川の沿岸に生息し、サハリンや千島列島、朝鮮半島東岸にも分布する。2013年に改訂された環境省の第4次レッドリストでは「絶滅のおそれのある地域個体群」として、島根県の改訂しまねレッドデータブック 2014 動物編では「絶滅危惧I類」にそれぞれ選定されている。

展示生物としてのイトヨの魅力は、春季では繁殖期にみられるオスの婚姻色や巣作り、求愛行動、オスの卵や仔魚の保護、夏から冬季は銀色に輝く稚魚から未成魚の群泳が挙げられ、展示水槽でもこれらイトヨの魅力が最大限に活かせるよう工夫している。展示水槽では、オスが卵を保護している途中で卵を取り出し、予備水槽でふ化させ、育てるという半人工的な繁殖も行っている。これにより、オスの婚姻色や巣作りの様子を何度もお客様に見ていただくことが可能になるとともに、複数の親を繁殖に用いることによって、繁殖個体の遺伝的な多様性を確保できるようになった。

島根県はイトヨの分布の南限域にあたり、宍道湖・中海水域以外ではきわめてまれな種となっているが、当水域でも近年減少が著しい。平成 17 (2005) 年度までは、ます網などで採集されたイトヨをシーズンに数十個体も搬入することができたが、その後数年はほとんど姿が見られなくなった。平成 22 (2010) 年度以降はシーズンに十個体程度であるが搬入することができている。水質や河川改修工事などに伴う生息環境の悪化などが減少の要因と考えられる。



卵を守るオス